

# 臨床のきれはし

## SHEET31

浅田 英輔

### Developmental Disability

講師を頼まれるものの中に、「発達障害の人への接し方について講義してほしい」というものがある。中身はいろいろ工夫するが、タイトルを聞くといつもなんかなあと思う。

発達障害という言葉もだいが認知されており、聴いたことがないという人はほとんどいないだろう。でも、「発達障害＝困った人」ととらえられることもあったり、逆に「困るやつはみんな発達障害だ」となっていたりするようにも思える。

自閉症や学習障害、AD/HD などの診断名は聞いたことがあると思う。この3つだけでもかなり違うだが、「スペクトラム」という言葉で表されるように、連続体であり、コミュニケーション能力の問題が大きい人、多動の問題が大きい人、感覚の問題が大きい人など、個々の状態像はかなり違っている。

何を言いたいかというと、「発達障害の人への接し方」なんてものは、「日本人への接し方」と同じくらいの幅広い意味を持ってしまふということである。日本人全てに当てはまる適切な接し方なんてものはない。例えば、「典型的な自閉症像」はある。「AD/HDの人がやりやすい失敗」もある。でも、「発達障害の人に適切な対応方法」なんてものはどこにもないのである。

「視覚障害の人の世界」や「聴覚障害の人の見え方」はまだわかる。それでも、全く見えない人、明暗は見える人、かなり視力は低い近づけばわかる人などそれぞれの生活の仕方は違っているだろう。それをいっしょくたにしてしまうのは少々乱暴なのではないだろうか。

同じ問題として、「うつの人への接し方」「ひきこもりへの対応」「不登校児への対応」なんかも似ている。「うつになった人」はみんな同じなのだろうか。あなたがうつになったときに、「うつの人にはこういう接し方をしろって本で読んだから」という接し方をされるとどうだろうか。腹が立つのではないか。「不登校になるとみんな同じ考えを持つ」なんてことはないだろう。

結局、「その人に合った適切な方法で接しましょう」ということに他ならないのである。自閉症だろうがAD/HDだろうが、その人がいやなかかわりかたはいやなかかわりかたでしかないし、どういう接し方がぴたりくるかは、その人と接してみないとわからないのだ。

ひきこもりへの対応として「引き出し屋」（屈強な男性が無理やり連れだし、“矯正施設”などで生活させる）が問題となったが、これもひきこもりのとらえ方が一面的であることの影響と思われる。「いま引きこもっているその人」であり、決して「ひきこもりの人」ではないのだ。

もちろん、ひきこもりや発達障害の特性で苦しんでいる人など、課題が大きい人たちは被害的になっていたり、言葉に敏感になっていたりはある。「バカだなあ」なんていう健康なときにはなんとも思わないような軽口でも「自分をバカにした」と思ってしまったり、「見捨てられた」と思うことはあるだろう。でもそれにしても、「発達障害だから」ではなく、「孤立してしまっていて過敏になっているから」という説明もできるだろう。

発達障害を理解するのに、「自閉症の特徴」「AD/HD の特徴」などを学ぶのは決して悪いことではない。「引きこもりの人はこう考えがち」というものもあるだろう。目が見えない人の世界のとらえ方はこういうものらしいとか、車いすで生活する人の困りごととは体験してみるとわかるころはあるだろう。多動で落ち着きがないのは、「コントロールするのが難しいらしい」という知識を持つておくことは必要だろう。

だからといって、「その人」を見ずに状態像の特徴だけで接すると、必ずうまくいかない。状態像だけみていると、「その人自身をみる」とが抜け落ち、表面的な接し方になってしまう。

管理職の人に「部下が発達障害のようなのだが、どう接すればよいのか」と聞かれても、専門職として端的な返答は「しらんがな」である（そんなことは言わないけど）。その部下がどういう人で、どういう場面で管理職が困って、どういう事態が起きてしまっているのか、それについてどういう対処をしてきたのかなどを聞かなければならない。「発達障害なんですね、こうすればいいですよ」「AD/HD なんですね、ならこうしましょう」なんていう答えはないのだ。結局のところ、細かい話を聞かなければならないし、その人がどう考えてその困った行動を起こしているのかわからなければならぬのだ。よく聞いていくと、発達障害だからどうこうなのではなく、その上司と部下の関係性が課題だったりもする。

「うつになって休職していた部下が復帰するのだが、どう接すればいいのか」も同じことだとわかるだろう。「うつから復帰した人にはがんばらせちゃだめだから、簡単な仕事からやらせましょう」なんていう答えは、その人を馬鹿にしているだけと言ってもいいだろう。どういう仕事をしていてどういう状況でダウンしてしまったのか、どの人とどういった関係性なのか、仕事の内容はどれがどうなのか、そもそも本人はどういっているのか、などなど、いわば「全部ケースバイケース」なのである。

「不登校だった不登校支援者」「うつだったカウンセラー」なども同じ問題をはらんでいる。「私は不登校だったから、不登校の子の気持ちがわかる」ことを前面に出してはいけない。なぜなら、不登校の状況はみんな違うからである。当然、「不登校のときの気持ち」もみんな違う。安易に「僕も不登校だったからわかるよ」なんてことはないのだ。「うつになったら全員が同じ気持ちになる」わけではないのだ。もちろん、「そう思っちゃうよね、わかるわかる」と共感できるころなんかはうまく活かせばいいのだが、全面的に理解できるなんてことはない。それは傲慢であり、相手に失礼である。

心理職の初学者が「あなたはそう思うんですね」と教科書通りの対応をしたら「バカにしてるのか」と思われるのも同じ理屈である（私も憤慨されたことがある）。確かに教科書にはそう書いてあるが、その人を見ずに「クライアント」「患者」としか見ていない場合はそうなるのは当然なのである。ネットに『カウンセラーと話していて、「あなたはそう思うんですね」とかの共感モードになられるとバカにされている気がする』みたいな書き込みがあった。「共感モード」は大事であることも多いが、相手に合っていないと、怒るのも当然なのである。傾聴って、きちんと聞く技術を身につけ、相手に興味を持ち、相手に向かい合う姿勢をもたなければならぬなど、結構難しいものなのである。

カウンセリング場面では顕著であるが、それ以外の広い意味での対人援助場面において、「学んだ知識」を先に持ってくると、たいていは相手を軽んじることになってしまう。まずはきちんとその人の話を聞かなければならない。

対人援助場面ではとしたが、一般的な対人関係でも同じである。あなたの仲のよい友人にも、発達上の偏りがある人はいるだろう。その人に対して、「こいつはそそっかしいからなー、ここでフォローが必要かもなー」と思うことはあっても、「発達障害だから適切な対応が必要だろう」と思うことはないだろう。

Sheet28 でも書いているが、対人援助職の役割は診断することではなく、その人に適切な支援を見つけることなのだ。診断名は大事だが、診断することは目的ではない。

啓発するときに、ことさらに「発達障害を知ってもらおう」とすることは、分断を進めることになっていないだろうか。最近、障害や特性がどんどん細分化していつている。特徴を捉えるために大事だという側面はもちろんあるのだが、「障害ごとに別々の支援制度を作らなければならない」となると、「あの障害はこの制度があるのにこの障害はないのか」とか、「こっちの障害は軽くみえるけど、とても困っている人がいるのだ」とか、障害の大変さ自慢になってしまっているのではないだろうか。

知的能力の低い自閉症の人たちは、一人で生活していくことはなかなか難しいだろう。じゃあ、知的に高い自閉症の人のほうが「障害が軽い」といえるのか？アスペルガーの人の中にも、課題を抱えながらも社会で仕事をしながら生きている人もいる。なかなか仕事が続かなくて、障害者制度をたくさん活用している人もいる。

制度も障害理解も大事なのだが、「その人のことをちゃんと考える」という姿勢を一番大事にしていきたい。